

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究 (古典)

小池 博明

紙幅の関係から中古の和歌、その関連分野が中心となることを、予めお断りする。

中古文学・和歌文学の表現研究は、昭和40年代から盛んになった。それを牽引した1人が小町谷照彦氏であった。著書には未収録の論文が多かったが、この度、「小町谷照彦セレクション 全3巻」(花鳥社)が完結して、その研究の全容を一覧することが可能になった。編者倉田実氏の解説は、今後の表現研究を考える上でも有益である。

現在の研究に目を移せば、半沢幹一氏『古代歌謡表現史』(笠間書院)が注目される。比喩を観点とした和歌表現論だが、比喩の厳密な定義によって、比喩との関係から擬人法、序詞、見立て、古今集仮名序の表現性、表現史も明らかになる。第三章「歌謡語表現史」は、文学研究一般の分析方法とは異なる視点と方法による、新たな「歌ことば」論である。比喩は、本学会全国大会のシンポジウムのテーマであり、西山秀人氏「歌枕の喩性」(『表現研究』116)が、歌枕を比喩として捉え、古今集時代に完成した歌枕が、散文作品において比喩性を高めたと、興味深い指摘をする。

注釈書は、徳原茂実氏『後撰和歌集』、近藤みゆき氏・松本真奈美氏『後拾遺和歌集』(以上、明治書院)などが刊行された。前者は後撰集の性格から詞書なども全訳し、後者は松本氏が関わる再度の後拾遺集の注釈だけに、焦点を絞った説明がわかりやすい。筆者が和歌を読み始めた昭和50年代末は、八代集すら古今集と新古今集以外に近代の全注釈がなかった。表現研究とともに、和歌の解釈も進展したと言えよう。

もっとも、和歌研究が解釈の点で手薄だという指摘もある(長谷川哲夫氏「長谷川哲夫著『定家卿百番自歌合評釈』」。『和歌文学研究』125)。この背景に、小町谷氏の業績を象徴する「歌ことば」、すなわち自立語の研究の進展に比べて、自立語を関係づけ、統括する付属語や、構文・文章についての考察が十分でない点があるかと推察する。その点から、和歌に使用される「あさぼらけ」と「あけぼの」の差が、時間経過や視覚性といった語義によるのではなく、下接語(かな／の・に)などの表現形式によるとした、篠原美夏氏「和歌における『あさぼらけ』と『あけぼの』の差異について」(『詞林』72)は、注目される。また、荒井洋樹氏『紀貫之と和歌世界』(新典社。2023年刊)は、表現を歴史的、文化的要素と関連付けて論じ、助動詞など文法的要素にも目配りされている。文章では、散文だが、半沢氏『「枕草子」決めの一文』(新典社)が、冒頭文と末尾文の分析から、枕草子は無括型や散括型が典型とされる随筆ながら、類聚章段に典型的な頭括型タイプの文章であると明快に説く。

他に、森田直美氏『平安朝文学と色彩・染色・意匠』(新典社)は、通説の再考を迫る論が多い。吉井祥氏「平安和歌における『和す』」(『日本文学』71)は、近年進む和歌の伝達に関わる機能や表現の見直し(その中心が吉井氏)をさらに進める。異分野だが、井上泰至氏・堀切克洋氏『俳句がよくわかる文法講座』(文学通信)は、理論と実践(詠む／読む)のバランスが見事で、和歌の表現研究にも有益と見た。(長野高専)